

高齢者医療センター通信

夏号

「食べる機能を支え、活気を取り戻す」

看護部長 平本美津恵

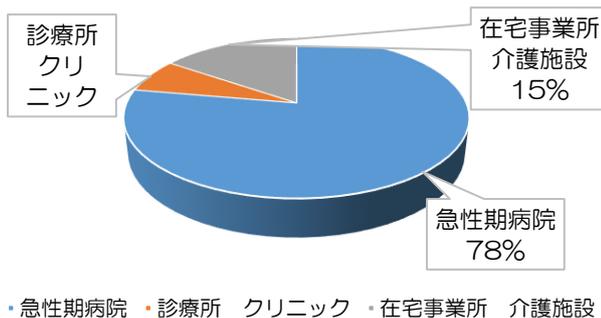
当院の入院患者さんの平均年齢は82.2歳です。最高齢は100歳の方でした。平均在院日数は35.6日と多くの方が1か月程度入院されています。ご自宅に退院される方が62.3%と一番多く、そのほかサ高住や老人ホーム、健康保健施設へも退院されています。

地域包括ケア病床の長い入院期間を活用し、歯科医師の診療に基づくオーラルフレイルへの介入も行っています。当院にいられてから摂食量が増える患者さんも多く、「ここのごはんはおいしい」と言っています。さらに、医療介護福祉士によるレクリエーションや健康体操などを計画的に実施し、ベッドから離れる時間を増やし、活気が持てるよう工夫をしています。老年医学的評価を踏まえた高齢者の栄養状態の改善は当院のアドバンテージですので、暑い夏で食欲が落ち、状態が悪くなられた患者さんなどもご紹介いただければと思います。

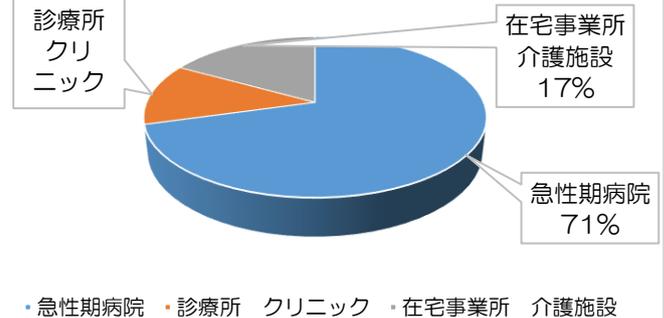
《レクリエーションのロビー体操風景》



入院患者様のご紹介元の内訳 (開院当初)



入院患者様のご紹介元の内訳 (現在)



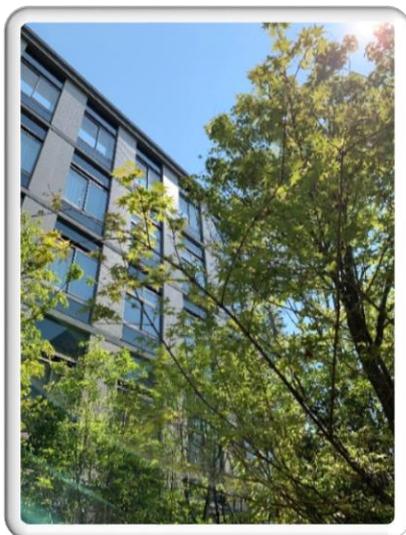
患者さんの受け入れ状況

開院当初は急性期病院からの紹介が8割近くあり、診療所・クリニックからのご紹介は7%程度でした。開院後5ヶ月以上経過してから、徐々に診療所・クリニックの先生方からのご紹介が増えてきております。今後さらに地域の先生方との連携を深めていきたいと考えております。

次に、これまでに当院に入院された患者さんの事例から、我々の診療の一端を紹介させていただきます。

事例① 80歳 男性 食道がん術後 入院期間 39日

術後、ADL（日常生活動作）が低下し、経口摂取だけでは十分な栄養量を確保できなかったため経腸栄養併用のもと当院へ転院した。当院へ転院後、多職種が各々の目的のもと介入した結果、全粥食で主食7～10割、副菜4～9割摂取できる状態まで改善した。栄養補給食品を追加することで目標摂取カロリーを達成することができたため、経腸栄養を中止することができた。血清 Alb（アルブミン）値は術後 2.0g/dL から 3.4g/dL まで改善した。多職種協働で集学的な栄養管理を実施し、食道癌術後の高齢患者の栄養状態を改善させることができたため、独歩で自宅退院となった。



事例② 89歳 女性 第一腰椎圧迫骨折

入院期間 41日

コルセット作製後、当院へ転院した。1年前より認知症のため内服薬の自己管理が難しくなっており、圧迫骨折後のリハビリとともに独居の自宅退院へ向けた環境整備を行った。服薬を最小限にするため疼痛の軽減に合わせて鎮痛薬を漸減した他、高血圧や脂質異常症等の薬剤を減量・中止した。また、転院時に施行していたインスリンを継続することは困難と考えられたため、内服薬に変更した。服薬管理が適切に行われるよう介護保険を申請し、訪問介護を調整したうえで、本人の強い希望に沿い自宅退院となった。

事例③ 90歳 女性 フレイル、老年症候群 入院期間 25日

1年前からの食思不振と体重減少、ふらつきのため外来受診、フレイルの診断のもと、諸症状（老年症候群）の改善目的のため入院。入院後にさらに不眠・頻尿が判明し、それがふらつき、食思不振からの体重減少に寄与しているとアセスメントし、睡眠薬の調整とβ3受容体作動薬の開始、意欲低下に対する漢方使用と栄養管理、リハビリの実施と多職種協働で介入した。その後、不眠・夜間尿が改善し、食事10割摂取が可能となり、ふらつきも改善したため、入院前にいたサ高住に退院となった。



学校法人川崎学園 川崎医科大学高齢者医療センター
患者診療支援センター
〒700-0821 岡山市北区中山下二丁目1番80号
TEL **086-201-5280**（患者診療支援センター直通）
FAX 086-225-2051

受付時間
平日 8:30～11:30
13:30～16:00
土曜日 8:30～11:30